

浜尾新

大学と漱石

大学と漱石

故人の徳を表彰するということは、それはいいことです。私も先年儒者捨場のことなどはたいへん善いと思つてやりました。その一周忌に當つて夏目氏のことを顕揚せられるというのも至極適當なことと思います。それについて私にも話をせよということですが私は生前そう直接に会うたことがあるわけでもなし、むろん交際したわけでもないから、本人について直接にはなにも知らないのです。ただ、私がまだ大学総長をしている時分すこし

関係のあったことがあるから、それについてお話をしましよう。

夏目が大学にいた時分のことでした。当時講師であったのを教授にしようとするについでした。夏目の学識はその時分大学でも十分認めていたのであるが、従来の方針が、英文学においては（ドイツ文学でも同じですが）その教授はやはり日本人でなく当国人がよいというので、そのころもかの小泉八雲という人が雇ってあったのです。しかし一方に、日本人の力量のある人が教授をするというこの実際必要であるという意見もあった

のですが、外国人と日本人の両方教授を置くということ
は事情が許さなかつたのです。もつとも文科大学でも英
文学やドイツ文学やの両科の外には日本人の教授が皆あ
つたので、この両科ばかりはやはり当国の文学は当国の
人のほうがよいという理由に発足していたのと、この他
の学科にそれぞれ必要な教授を置くことのためにいわば
なかなかそこへまわらなかつたのです。

しかし、この両科に日本人の教授を必要とする考は文
科大学にもしだいに濃くなつて来、一方夏目の力量がよ
く認められてきた結果、日本人の教授の問題がだんだん

進むことになり、時あたかも小泉八雲が亡くなるということになってきたので、文科大学でもそう考えてきたのですが、とくから夏目の学識を認めていた私は、ぜひ夏目を教授にしたいと思いきめるに至ったのです。そこでこの大学教授問題は夏目の友人等の仲介によって夏目に伝えられることになったのです。

ところが、ものは行違いになってしまいました。夏目はああいう男ですから、もちろん中間に多少の行違いもあったのですが、この大学のほうの提言を妙にとってしまったのです。夏日はこちらの提言をもって、自分の自

由を束縛するものと思うたらしいのです。大学が夏目を教授にするということはこれによって夏目を世間から断ち夏日の思想芸術等を世の中に直接せしめないのである、とこうとってしまつたらしいのです。夏日の考ではいったん大学にはいったら大学教授たる身分上から文章もかけぬ著述もできぬその他役人としていろいろ窮屈な思いをしなければならず、あらゆる自由を束縛されるということをたいへん顧慮したものとみえ、この誤解からひどく夏目は怒ってしまい、とうとう後に大学に対する悪口を新聞などで書くということになつたのです。もつ

とも前にいうたとおりにこれには中間における行違いや大
学側の個人に感情上の行違いはあるいはあつたかもしれ
ぬが、自然大学そのものとも感情上折合わないことにな
つたのです。大学のほうではせつかく教授にしようとい
うところまで運んだあかつきにこういう仕儀であるか
ら、夏目ほどのものを教授にしないということには惜しい
には惜しいけれども、本人がそんなにいうているものを
むりにするといふわけにもゆかぬからそれきりにするこ
とになつたのです。それと前後して夏目は朝日新聞へ入
ることになつたのです。当時これは人々の邪推であつた

かもしれぬが、夏目がああ手厳しく大学側の提言を退けたのはすでに新聞社との交渉が進んでいたからだというて私のところへ言うてきたものもありました。なお今言うた大学が教授にするのは世間から自分を押し込めてしまおうとするにあるという誤解の外に実際大学教授では報酬が少い、子供のたくさんな家族を養うてゆくのに足りない、つまり大学でははじめは奏任何等というところから行くのですからそれは先で勅任にもむろんなれるにしても差当ってなかなか収入もそれでは足らぬと考えた点もあつたろうと思います。とにかくこういう次第で大学

とは縁も切れ、また大学を去って朝日新聞社へはいることになったのです。

大学との関係は今言うたとおりで、夏日の遣り方や考えようはそういうふうであつたけれどもそれが別に夏目という人の学問になんの変化をも起さないのです、その学識とか力量とかを認めていた大学では、そんな行きさつどのいかにかわらず、その学識に対し、その後、相当の敬意を払って氏を文学博士に推薦することになりました。それは前にちよつと本人に打合わせておけばなおよかつたかもしれないが、前に承諾を得ておくという

筋合いのものでもないところから、文部大臣は同氏に学位を授与し、当人を呼び出したが出頭を断り受了を辞したため単に文部省から学位記を送ったのです。それをまた夏目は返送してしまったのです。そこで学位記は夏目の手にはなくて文部省へ帰ってきたから当人は帰したのだといい文部省では学位記は返っても学位の授与は済んでいるということになった。文部省では制規の手続を経て授けたことゆえ撤回するわけには行かぬというので、事はそのままに終わっていたのです。

夏目と大学とは前にもいうたとおりましたたく縁が切れ

てしまつたのではありましたが、私はなお夏日の学識を惜しんでいましたものですから、私はその後もなお夏日の友人たちを通してしばしば夏日に言伝をしました。それは氏の学識をもつと有益に用いるということについてはです。すなわち

氏はその後朝日新聞に入つて小説を書いていました。一年に二回とか三回とか新聞に小説を書けばよいので、それだけで相当の報酬を贈るということであつたそうです。それは勿論大学教授の俸給よりは大きなもので生計のうえにもらくなことであつたのでしよう。

それまでも夏目は、「吾輩は猫で御座る」とかなんとかいうのをはじめその後にかけていろいろの小説を書き、朝日新聞にはいつてからも続々いろいろな小説を書いていました。私は夏目が新聞で小説を書くということについて他の人とはすこしちがった考えを持っていたのです。それは夏目の書く小説ですからそれは小説としても世の普通の小説家が書く小説とは異るところがありその識見はより格段に面白く有益でもあったにちがいなかったろうが、私は夏目という人は小説をかくというよりももっと大きなたいせつな仕事があると思うていたので

す。私はこの人の学識は単に小説を書くというだけでは
はなはだ余りあるものそれでは勿体ないものと思うたの
です。それは漱石の小説は漱石でなければ書けぬであろ
うしまた世の小説界においても夏目を俟ってこの小説あ
りということもあるべく、夏目が小説を書いたことによ
って小説界そのものをもまた世の中にもいろいろ裨益す
るところはあつたであらうが、あるいは、それは必しも
氏を俟たぬとも言えよう、夏目をして初めてなし得たこ
とではあるかもしらぬが、夏目でなければ外にとうてい
できぬと私の思うことに比べれば必しも氏を俟たぬとい

えるように思う。つまり新聞で小説を書くということよりもっと氏でなくてはならぬと氏を措いてはできぬと思う仕事がある、と私は自信していたのです。……そのことについて私はしばしば言伝をしてやったのです。

私の考では、夏目という人は当代の英文学者の秀であると思う。氏はその学識も深く高くまた文章の才と能とがある。この人の学と才とをもってして日本を世界と結付けることをしてもらったならと私は思うたのである。日本人に対し種々腹蔵を傾け日本人に何物かを与えるということよりも、その識その筆……英文をもつて日

本のことを紹介するということに従うてもらいたいと思
うた。これをするのは、よくこれを書く筆の人であつて
同時によく日本を味い得る識見の人でなければならぬ、
この筆が少いうえに識を併せ得る人がほとんどない、夏
目あつてわずかにこれを得た心持がしていた自分は、ど
うしても氏をしてここを自覚せしめたいと焦慮したので
す。

日本は今では世界の一強となつてゐるが日本の實際は
外国人に知れていない。外国人の日本について知ってい
るところはまことにわずかである。外国との往来はなか

なか盛であるが多くは世界の大部分における知識は皮相の観察や旅中の囁目にすぎなくて広く深く知られることが非常に少い。それはなぜかというに、外国人が読むべき日本に関する本の少いことである。これは日本のよく分る日本人が日本を外国へ伝えるために著述をするということをしないからである。日本を書いた書物で外国人間に読まれる書物というはごく少数である。かのハーン小泉八雲の書いた五六冊の著書くらいなもので、その他には、岡倉（覚三）が *Far East* や *Book of Tea* を書いたのに、後に新渡戸の『*武士道*』があるくらいのものです。

岡倉の *Book of Tea* という本は御覧でもありましたろうが、茶の起源から始め遠く老荘の心からまた利久茶等に及び茶の趣味を説きながら日本の「渋」^{さび} という味をなかなかよく伝えていきます。こういうごく少数の書物がわずかに日本というものの一部を外国人に伝えるより外に広く外国人に読まれて世界の前に披げらるる説明図はないのです。こういう方面の仕事をこそ夏目たる人はやらなければならぬと私は思った。夏目ならばこの仕事ができる、他の人ではできない。すなわちこの仕事は夏目という人の持っていた学識と才量とをもつとも十分にかつ有

益に使い得ることであると思い、新聞で小説を書くよりもと思うたのです。

こういう意味から、そして古い大学出身者が少しでも多く世の役に立ち本人もまた都合よく思うたから、ぜひ夏目のする仕事の方面を一転してその学識その才筆を十分に遺憾なく発揮することになってもらいたいと深く思うたから、その後も人を介して再三勧告をし、自分が逢うてよいことならいつでも会おうとまでいうたが、夏目はついにそういう心を起さず、一度も面談もせずを終ったのであった。

私は、大学に住することを得なかつた夏目その人を遺憾に思うとともに、この世界的の事業に従事しなかつたということ返す返すも惜むのです。

夏目の学識と人格をと私は深く信じます。私は夏目が大学とまったく関係が切れて後もなお氏の大学に来ぬのを惜みかつ同じくは少しでも氏の学識と才能とを日本のため世界のためもって人間のために發揮せしめんと庶幾^{ねが}うたのです。それだけ夏目のこの点に意を向けなかつたのを残念に思うのです。

例の一種特別な変つたあの性癖であるにかかわらず、

また大学と特にあんな妙な関係になつたに關せず、夏目の学識と人格と——それはむろん別のことです——私はそれを認めます。(城筆記)

(大正六年十二月、「渋柿」)

日本文学電子図書館

大学と漱石

著者 浜尾新

制作者 宮澤一郎

底本 「漱石全集 別巻」角川書店
昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館